

「それしか・・・信じられるものが・・・」

ヨハネによる福音書 1章1～18節 (1)

東京の私鉄沿線の、ある小公園。

時計が午後九時を回ると、子どもたちが一人、また一人と集まってくる。

二人のときもあれば、十人以上のときもある。

この日は六人。

すべり台の上で、男の子が二人話している。

きいーっ、きいーっ と音を響かせて ブランコをこいでいるのは二人の男子。

ベンチには男の子と女の子が座っている。

みんな中学生だ。

三つの市から、自転車やバイクや電車でやってきていた。(略)

ベンチで紫のバンダナを額に巻いた彼氏に肩をあずけていた中二のミユキは、茶髪でまゆの細い、きゃしゃな子だ。

最初、公園行きを両親に反対されたが、友だちにかける電話代が月二万円を超え、「公園なら いくら話してもタダだから」と言うと、黙認されるようになった。

小さなビニールのアルバムを持ち歩いている。開くと、女の子五人が海岸で手をふっていた。彼氏との写真には、ピンクと黄緑のペンで「LOVE LOVE」と書いてある。

「楽しかったことが、いつでもパッと思い出せるじゃん」

学校での写真は一枚もない。中学にはいやいや行っている。勉強は、小学校三年くらいからわからなくなった。

「うっそー」「えー、ほんと？」しか言わない学校の友だちなんていないと思っている。

この日も授業中 超むかついて机をたたき、横の壁をけった。バーンという音がして、同級生がいっせいに振り向いた。

黒板に書いていた先生も一瞬ふりかえったが、また授業を続けた。

「先生もさあ、みんなもさあ、マジだけど、本気じゃないんだよ」

新聞のルポルタージュ記事です。「先生も友だちも本気じゃない」と言います。全身でぶつかれない、歯がゆさとも寂しさともつかぬ思いが伝わります。「真剣に話しているのに 私の気持ち 笑って流す あなたは教師」。高校2年生の、そんな短歌もありました。実際、私たちの日常は事なかれ主義や保身や、嘘やごまかしや見せかけで満ちてはいないでしょうか。その破れが弱い

ところ、無防備なところ、無垢^{むく}なところに現われているように思われます。そして、私たちはそのようなか、嘘のない真実なものに渴いてもいるのではないのでしょうか。ポーズでない、文字どおり自分を懸けてくれる、また自分を懸けられる本物の関わりと言えるものが欲しいからです。

私の好きなポピュラーソングの一つに、「オネスティー (Honesty)」という曲があります。御存じの方も多いかと思います。ビリー・ジョエルという、アメリカの歌手の曲です。日本語にすると、こんなふうになるでしょうか。

優しきなら、見つけるぐらい 難しくない。
生きるための愛だって、手に入れられる。
でも、真実を求めるとき、まるで闇の中にいるようだ。
真実であるとは、いつもなんと難しいことか。
誠実とは、なんと寂しい言葉だろう。
誰もがあまりに真実でないから。
嘘がないということ、それは忘れかけられたもの。
だが、それこそ、何よりあなたに願うもの。
いつだっているもんだ、同情を口にする人は、心の内をつつまず話せば。
でも、可愛^{かわい}い顔して じょうずな嘘をつく人など、要^いりはしない。
ただ欲しいのは、信じられる人。(略)
恋人ぐらい 見つかるさ。
友だちだって、安定だって、手に入る。
そう、苦^{にが}い終わりを知るまでは。
そして、誰もが慰めてくれる、また同じ約束の言葉で。
分かってるさ、分かってるんだ。
考え込んでるからって、そんなに心配することはない。
心^{こゝろ}が虚ろでも、妙なお願いなどしないから。
でも、真心が欲しいとき、他のどこに行けというのか。
信じる人はあなたなのだ。
誠実とは、なんと寂しい言葉だろう。
誰もがあまりに真実でないから。
嘘がないということ、それは忘れかけられたもの。
だが、それこそ、何よりあなたに願うもの。

一種のラブソングですが、ここにも 真実と誠実さを求める心の渴きが満ちています。

私たちは、渴きの中にいます。真実な本物の関わりを求めて、渴いています。それがないからではないのでしょうか。実感できないからです。そして 実のところ、「それらは結局、私たちの内

には見出せないのでは・・・？」と気づき始めてもいるように思います。「人間は、自分たちの無力さが避けがたいものであることに気づいている」と、古代ローマの哲学者 セネカは語りました。人の世の現実、はるか昔、2,000年前から変わらないようです。人間そのものがそうした存在だからなのでしょう。

作家の遠藤周作さんは最後の長編小説として『深い河』という作品を書かれましたが、その中にこんな一節が出てきます。

この世は集団ができると、対立が生じ、争いが作られ、相手を貶めるための謀略が生れる。戦争と戦後の日本のなかで生きてきた磯辺はそういう人間や集団を嫌というほど見た。正義という言葉も聞きあきるほど耳にした。そしていつか心の底で、何も信じられぬという漠然とした気分がいつも残った。だから会社のなかで彼は愛想よく誰ともつき合ったが、その一人をも心の底から信じていなかった。それぞれの底にはそれぞれのエゴイズムがあり、そのエゴイズムを糊塗するために、善意だの正しい方向だのと主張していることを実生活を通して承知していた。彼自身もそれを認めた上で波風のたたぬ人生を送ってきたのだ。

社会の現実のように思われます。けれども、私たちはその現実をなかなか直視しようとはしません。現実から目を逸らそうとするのではないのでしょうか。人生の駆け引きや人のごまかしと、さらには自分自身の偽善や保身と何度も出くわしながらも、しかしそこから巧みに目を逸らし、上辺を取り繕って生きている。真実のまれなこの世の深い闇に引きずり込まれたら 抜け出す術がない、とでも言うかのようです。平静を保ち 自暴自棄に陥らないためには そうするほかない、とでも言うのでしょうか。人の世の本質が、すなわち人間そのものの本質がそのように偽りの闇に侵され、真実から遠いということなのかもしれません。

私たちは今月から「ヨハネによる福音書」の冒頭に移り、順を追って、福音書の語りかけに耳を澄ませようとしています。初回の今日は、「初めに言があった」(1:1)と語る有名な箇所です。しかし、とりわけ難解な箇所と言ってもいいでしょう。ヨハネの福音書を書いてまとめた者(たち)は私たちと趣を異にする文化圏に生き、しかも同時に2つの文化を背景にして語っているからです。一つはギリシア世界の文化であり、一つは旧約世界のそれです。もちろん、ギリシア世界の文化においても旧約世界のそれにおいても、「ことば」という語は私たちが通常使うと同じ意味でも用いられました。いわゆるコミュニケーションの手段としての言葉です。ですが、いずれにおいても、それは単なる手段以上の もっと大きな意味を持つものでもありました。

ギリシア人は、自然に目をやりました。天を見上げました。するとそこには、秩序がありました。自分たちを取り巻く世界が無秩序な混沌ではないことを知りました。そして、思いました。「世界はなぜバラバラにならず、秩序を保っているのだろうか」。そのときです。哲学者が言いま

した。「そこには『ロゴス』が、すなわち『言』が存在するからだ」と。無限の理性を持ち、合理的な秩序を維持する全宇宙の魂のようなものです。そして、人の理性もまた、このロゴスから来ているとされました。このように、ギリシア文化を知る者にとって、ヨハネ福音書の表現は決して疎遠なものではなく、何より重要な究極の存在や真理について語るにふさわしいものでした。

一方、ユダヤ人にとっては、「ことば」はギリシア人とはまた違った特別な意味合いを持っていました。旧約聖書が語る意味合いです。旧約聖書には、神の言葉をめぐる記述がそこかしこに記されています。そして、それらは一貫して、一つの神の姿を描き出しています。言葉をもって事をなされる神です。創世記の冒頭、天地創造の物語は記します。「神は言われた。『光あれ。』・・・神は言われた。『水の中に大空あれ。』・・・神は言われた。『天の下の水は一つ所に集まれ。』・・・神は言われた。・・・神は言われた。・・・神は言われた」(創世記 1:1~31)。そして、そのたびごとに、こう続けます。「そのようになった」(同)。こうした神の姿は、イザヤ書の言葉に明確に見て取れます。イザヤ書において、神はこう言われます。「そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」(イザヤ 55:11)。ユダヤ人にとって、神が何事かを言葉にされる時、それは、神がその何事かを言葉のとおりになされる時でした。神の言葉は無責任な言いつ放しの言葉ではない。神とその言葉の間にはわずかな食い違いもない。そこには、巧みなごまかしはもちろん、口先だけのリップサービスも気休めのポーズもない。それが、旧約聖書に生きたユダヤ人にとっての神の言葉でした。言葉は、それを発する者と一体だったのです。ドイツのあの文豪 ゲーテは有名な詩劇『ファウスト』の中で、主人公のファウストにヨハネの冒頭の言葉を訳させ、「太初に^{たいしよ}行^{おこない}ありき」と、すなわち「天地の初めに行ないがあった」と表現しました。ユダヤ的な観点からすれば、あながち的外れとも言えません。

さらに、ユダヤには興味深い歴史があります。旧約聖書の原文はヘブライ語で書かれていますが、しかしユダヤも例にもれず、時とともに元々のヘブライ語は日常の話し言葉としては使われなくなり、学者以外ほとんど理解できなくなっていました。私たちが辞書なしには古文を理解できないのと同じです。とはいうものの、ユダヤ教の礼拝は、原語のヘブライ語で聖書を朗読する決まりになっています。そこで、^{べんぎじょう}便宜上、『タルグム』という日常語訳の聖書が生まれることになりました。ところが、ここでまた、問題がもち上がります。そのころ、ユダヤには、律法を破ることを極端に恐れる空気が充満していました。そのため、律法を二重三重に厳格にし、不注意で多少間違いを犯しても大事に至らないようにしていました。そんな知恵の一つとしてあったのが、^{じっかい}十戒の第3の戒めに関わるものでした。「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」(出エジプト 20:7)という、あの戒めです。彼らが執った手立てはこうでした。「律法を破ったら、大変なことになる。そうだ！ 神の名をいっさい、口にしなければいい。そうすれば、決して間違いを犯すことはない」。身を守るため何も言わない、何もしないという、よくある消極的な知恵です。こうして人々は、「神」という名をそのまま口にするのを避けるようになりました。そうした苦心の跡が『タルグム』にも見て取れるのです。元々の意味合いを押しえつつ、しかし、直接的

な言い方に代えて別のしかるべき表現を「神」に当てる。一種の意識です。そして、その中に、次のような例が繰り返見られます。出エジプト記に「しかし、モーセが民を神に会わせるために宿営から連れ出したので、彼らは山のふもとに立った」(出エジプト 19:17) という箇所があります。これが『タルグム』では、「しかし、モーセが民を神の言葉に会わせるために宿営から連れ出したので、彼らは山のふもとに立った」と、じかに「神」と言うかわりに「神の言葉」と言い換えられているのです。聖書学者によれば、「ヨナタンのタルグム」(「基本の学び」参照) という旧約聖書の一部を取めたそのタルグムだけでも、こうした表現が320回余り出てくるといいます。つまり、ユダヤでは、「神の言葉」と言うとき、それは神御自身を意味する場合が少なくなかった。それだけ神は言葉と一体で、神の語られる言葉には一点の裏もないとされていたのです。ここでもまた、神はその言葉に真実を込められる方でした。

キリスト教はその揺籃期を、旧約聖書を共にするユダヤ教の中で育まれました。ですから、ユダヤ教の伝統文化がその背景に確固としてあったのは言うまでもありません。「ヘブライズム」と呼ばれる精神文化です。がそれと同時に、「ヘレニズム」と呼ばれる文化も紀元前の頃から、パレスティナの一带にすでに浸透していました。ギリシア的な考え方に基づく精神文化です。つまり、ヨハネの福音書にまつわる人々もそうした二重の文化の中にあっただけのことです。さらには、ギリシア世界を知る離散のユダヤ人がキリストの教会に加わるようにもなります。「ヘレニスト」と呼ばれる人たちです。ヨハネの群れの中にもそうしたヘレニストのいた可能性のあることが言われています。(本シリーズ初回の「はじめに」所収「『ヨハネによる福音書』を読む前に」と「添付資料：年表、地図」を参照)

そのような文化の中にあっただけのヨハネの教会が、しかししだいに、外からの圧政と内からの迫害にさらされていきます。そして、紀元70年、それが決定的な時を迎えたのでした。ローマ帝国によるエルサレム神殿の破壊です。ローマの圧政が極に達しました。しかも、神殿を失ったユダヤ教は、律法の教育とその遵守の徹底を図るようになります。神殿礼拝に代わるものとして、内側から信仰を強化する以外、祖国の一致を図る術がなくなったからです。そして、その結果、さらにも強められたのがほかでもありません。自分たちと異なる者らへの迫害であり、異分子キリスト者の排除でした。要するに、「ヨハネによる福音書」はこれらの後、これらの出来事を受けてまとめられたということです。すなわち、こうした内外からの圧政と迫害のなか、ヨハネの教会はその信仰を揺さぶられ、教会から離れる者さえ現われた。しかも、パレスティナの周辺へと移動するにつれ、ギリシア的な文化とその人々により近く向き合うことにもなった。ヨハネの教会はそのようにして、自らの信仰理解をいま一度、確かなものにする必要に迫られたのでした。信仰のアイデンティティーの確認です。そうすることで、自分たちの足もとを揺るぎなくし、脱落者の出るのを防ぐとともに、すでに脱落した者たちを復帰させること。と同時に、外のユダヤ人たちに対し、イエス・キリストの理解を明確にし、彼らをも福音に招くこと。さらには、より近く向き合うようになったギリシア文化の人たちにも同様に、自分たちの信じるお方を伝えること。「ヨハネによる福音書」はそのような目的のもとにまと

められたのでした。ですから、ギリシア的な精神文化とユダヤ的なそれとが絡まるようにしてそこに二重に認められるのも不思議でないのではないのでしょうか。ユダヤ教と共有する本質を押しえつつ、同時にギリシア的考え方とも照らし合わせ、イエス・キリストの信仰を明らかにしようとした。「ヨハネによる福音書」はそのような福音書と言えるでしょう。(同上参照)

とはいうものの、神は時として、人間の伝統や常識を^{くつがえ}覆されるお方でもあります。福音書をまとめた者(たち)はその地の文化的伝統や常識を踏まえ、読む者の理解を助ける表現を用いました。しかし、信仰には、それまでの見方を超えてものを見る目を求められる時があるのではないのでしょうか。それまでの理解を覆され、より深い真理に目を開くよう求められる時です。ヨハネは言います。14節、「言は肉となって・・・」。ここで「肉」と訳されている言葉は原語のギリシア語で「サルクス(σάρξ<σάρξ, σαρκός, ἡ)」といい、英語では「フレッシュ(flesh)」。文字どおり「肉」を意味する語です。けれども、福音書が書かれた紀元1世紀の平均的な人々にとって、これはとうてい考えられないことでした。ヨハネは、「肉となって」と語ります。「人となって」でもなく、「人の体を纏^{まと}って」でもありません。「肉となって」です。これ以上ストレートな、ある意味でこれ以上剥^むき出^だしな言い方があるのでしょうか。世界の秩序の根源たるロゴス、宇宙の理性の根源たるロゴス、崇高な絶対者なる言が私たちと全く同じ人間となった、というのです。私たちと同じ一人の人となってこの世に来た、というのです。現代の私たちにはなおのこと、信じがたいことかもしれません。しかしながら、この剥^むき出^だしな言い方の中にこそ、ヨハネが伝えたかったことのエッセンスがあるように思われます。

そもそも、ギリシア的な考え方によれば、肉体は汚^{けが}れたもの、悪^{らうごく}しきもので、精神の牢獄でした。ですから、ギリシア世界の人々にとって、ロゴスが肉体をとるなど、夢想だにできないことでした。一方、ユダヤ人はユダヤ人で、神とは人間をはるかに超越した、高きにいますお方と考えていました。崇高な存在で、人が目で見ることなど、及びもつかないことでした。目に見える形あるものを礼拝することはすべて偶像礼拝とされ、厳しく排斥されました。このため、言が肉となる、すなわち神的存在が目に見える人の形をとるなど、とうてい受け入れられることではありませんでした。このように、ギリシア的な常識からしてもユダヤ的な常識からしても、神のごとき存在が人となって目に見えるものになるなど、論外のことだったのです。しかし、ヨハネはまさに、この常識に語りかけます。たとえそうであっても、事実、言は肉となったのだと。暗闇の中にいる人間に命を与えるため、人々を照らす光として、言が肉となった。恵みを豊かに満ちし、真理を示すため、言が人となられた。そう語るのです。そして、続けます。「イエス・キリストこそ、独り子なる神が人となられたそのお方である」(1:14、17、18)と。

伝統や常識というのは時に、ちっぽけな人間の組み立てた小さな狭い世界にすぎないこともあるのではないのでしょうか。時代や社会が変われば、いとも簡単に過去の遺物になってしまうようなものもあります。常識だけですべてが見えるなら、信仰など要りはないでしょう。けれども、常識という名の融通の利かない訳知り顔はしばしば、私たちの目を曇らせます。私たちの小さな世界をいつそ

う小さく、いつそう貧しくしてしまいます。より広い世界を見たいと願うなら、より深い真理を知りたいと願うなら、伝統や常識を超えて見る目を求められる時があるのではないのでしょうか。それまでの枠を外し、勇気ある新たな目を開くように求められる時があるのではないのでしょうか。囚われから身を解き放つ時です。信仰とは、この囚われからの解放にほかなりません。

ヨハネは言います。「言が肉となった。独り子なる神が人となられた。イエス・キリストにあって、人となられた」。「ヨハネによる福音書」の核心の一つです。のみならず、キリスト信仰を支える中心的メッセージの一つでもあります。それはすなわち、こう語るものにほかなりません。「神はイエス・キリストにあって、この世に御自身を示された。神がどのようなお方か知りたいと願うなら、そして神に出会いたいと願うなら、イエス・キリストを見るがよい。人として生まれ、人として生きられた独り子なる神、イエス・キリストの生き様と死に様とを見るがよい」

そこには、ヨハネにとって譲ることのできない真実なる神の生命線がありました。実は、当時からすでに、キリスト教会の中にも、神のようなお方が文字どおり人間になるなどありえないとする人々がいたからです。醜い肉体をとって その聖さを汚すことなど、あろうはずがない。キリストは神から遣わされた霊で、食べ・飲み・痛み・苦しむといった 人間としての外見はすべて見かけだけで、幻影にすぎない。そう主張する人々でした。いわゆる「グノーシス（覚知、靈知）主義」と言われる考え方です。たしかに、そこにも神はいました。しかし、それはどんな神なのでしょう。「あなたがたを愛するがゆえに、独り子を送る」と、いかにも私たちを愛し、その思いに抗しきれずに、この私たちのもとにイエス・キリストを遣わしたと語る神。とはいうものの、私たちに真のいのちを与えるため、自ら痛み・苦しみ・涙したという その独り子・キリストのすべては見せかけで、単なる演技でしかなかった。実のところ、痛くも痒くもなかった。あの十字架の瞬間でさえ、その苦悩や苦悶の表情はどれも作られたものにすぎなかったとしたら、そのキリストとはいったい 何者なのでしょう。そして、キリストにそのような演技をさせたその神とはいったい、何者なのでしょう。グノーシスの考え方にはこれ以外にも様々なものがありましたが（「基本の学び」参照）、いずれにせよ、そこにあるのは真実と似ても似つかぬ、見せかけのポーズだけです。そこには、本気で体を張る真実な独り子もいなければ、その父なる神もいません。だからこそ ヨハネは、洗練された上品さをかなぐり捨て、粗野とも思えるほどの剥き出しの言葉で「言が肉となった。幻影などではない。独り子なる神が事実、私たちと同じ人間となられたのだ」と記したのではないのでしょうか。そこに、ポーズでない、神の真実がかかっているからです。そこに、悟りや観念でないキリスト信仰の生命線があるからです。

私たちは人と言葉の交錯する世界に、すなわち、それらの行き交う世界に生きています。そして、そこは私たちの願いに反し、真実に乏しい世界、嘘・ごまかし・取り繕い・言い訳・見せかけ・ポーズの溢れる世界と言わざるをえません。なのに、私たちはなおも 偽物に心を奪われ、なくてはならぬものを失い続けているように思われてなりません。時には、なおタチの悪い、9割の誠実さでしか

し決定的な1割の嘘を隠してごまかす本物もどきに惑わされ、そうしてしまいます。大切なものをどこかに置き忘れたまま、虚しさの上に虚しさを重ねてはいないでしょうか。静まって、本当に大切なもの、なくてならぬもの、本質的なもの、偽りのない真実なものにいま一度、目を向け直す必要があるように思います。

実際、私たちはどこかで何か足りないと感じながらも、その欠乏感に蓋^{ふた}をして生きたりしてはいないでしょうか。破れやすく壊れやすい子どもたちの姿に、そんな思いがとりわけ顕著に感じ取れます。「眠る男」という作品で国際的な賞を取った映画監督の小栗康平^{おぐりこうへい}さんがかつて、こう述べておられました。

ナイフの事件をきっかけに「キレル」という言葉がはやっているけれど、僕はあれは「切れ」たんじゃなくて、つながろうとしてるんだと思う。・・・「キレル」と呼ばれる激情は、根太い命の時間につながりたいという衝動なんじゃないだろうか。

何か欠けている、何か大切なものが足りない。破れやすく壊れやすい子どもたちは、誰よりも繊細に そのことを訴えかけているように感じられます。私たちもまた、本質的なものに渴く、そうした思いを大事にしたいと思われています。

イエス・キリストはこの世に来られる必要はありませんでした。真実でないのはこの世のほうで、主イエスではないからです。イエス・キリストは私たちのもとに来られる必要はありませんでした。偽りに満ちているのはこの私たちのほうで、主イエスではないからです。にもかかわらず、イエス・キリストはこの世に来られ、この私たちのもとに来てくださいました。自らの言葉に真実だったからです。愛するとは、愛する者のために、理屈を超えたそのところにあえて踏み込むことではないでしょうか。理屈を超えて、自らを差し出すことです。語った言葉を生きることです。愛する者のために、体を張って真実を生きることです。主イエスの生涯は、まさにそうした生涯でした。馬小屋に生まれ、貧しさに生き、人々の裏切りと拒絶を甘んじて受け、そして十字架上に死なれました。低きに生まれ、低きに生きられた生涯でした。そのすべてが、そうする必要のないものでした。卑しく貧しいのはこの私たちのほうで、裏切られ拒絶されてもしかたのないのはこの私たちのほうだからです。にもかかわらず、イエス・キリストはあえて、その理不尽な生涯を生き抜かれました。私たちの苦しみ^{しみ}のすべてを味わい、私たちの醜さ^{みにくさ}のすべてを身に負うためでした。そうすることで、私たちのうずくまるその場所にうずくまり、私たちの受くべきすべてをその身に受けようとされたのです。それはまさしく「私はあなたがたを愛する」と言われた、その言葉に真実な姿でした。福音書はその生き様の記録であり、主イエスの真実の記録にほかなりません。信仰とは、このイエス・キリストの内に人間を超えた真実を見ることではないでしょうか。聖書が記す主イエスの真実に出会うことです。そこで「この人に嘘はない」と、イエス・キリストの内に人間以上のものを見ることです。聖書の信仰というのは、突き詰めれば、この一点にかかっているように思われます。主イエスの内にはたして、何を見るか。この一点です。

学生時代、客員で来ていた一人の先生がおられました。国際的にも名の知られた教授で、精神医学のクラスでした。先生はクリスチャンではありませんでしたが、その折、余談でイエス・キリストについて一言^{ひとこと}、こう触れられたのを思い起こします。「精神医学の見地からするなら、イエス・キリストは特殊な異常者か、もしくは極めて特別な人間と考えられる。しかし、その倫理性の高さや一貫した言動からして、異常者とは考えにくい」。言葉と行動に寸分の違いもギャップもない。私たちはそれを「真実」と呼びます。主イエスの生涯は、そうした生涯でした。ヨハネの語る信仰とはそこに人間を超えた神の御姿^{みすがた}を見、その言葉に信頼して生きることにほかなりません。

人は上辺の満足を求め、心の内に虚しさの空洞を開けました。どうしてもよいことに心を奪われ、本当に大切なものを見失いました。本質を忘れ、真実を忘れ、確かなより所を忘れた存在。私たちはそうした存在として、真^{まこと}のいのちに遠いものとなってしまいました。しかも、言い知れず^{よど}澁む無力感がこれに追い打ちをかけます。私たちの内には、このけだるさから引き上げてくれる確かなより所が見つからない。いかんともしがたい現実からくる空虚感、無力感です。しかし、そんな私たちのもとに、神は御自分のほうから来てくださいました。イエス・キリストにあつて、そんな私たちのただ中に来てくださいました。それは、なんとも理不尽なことでした。ただ「あなたがたを愛する」と言われたその言葉に真実な神の、真実な行為^よでした。

ローレンス・ハウスマンというイギリスの詩人が次のような詩を詠んでいます。

光が見下ろすと、闇があった。
光は言った、「私が行きます」
平和が見下ろすと、争いがあった。
平和は言った、「私が行きます」
愛が見下ろすと、憎しみがあった。
愛は言った、「私が行きます」
こうして、光が来て、輝いた。
こうして、平和が来て、安らぎを与えた。
こうして、愛が来て、いのちをもたらした。
こうして、言は肉となり、私たちの間に宿られた。

福音書を読むとき、人々が繰り返す、主イエスにこう尋ねているのに気づかされます。「私は何をしたらよいのでしょうか？」 イエス・キリストの内に真実を見、真^{まこと}のいのちを見たからです。人生を生きるに足るものとする確かなより所を見たからです。私たちもまた「私は何をしたらよいのでしょうか？」と主イエスに問い続け、求め続ける者でありたいと思います。

初めに御紹介した遠藤周作さんの『深い河』は、こんな一節で終わっています。

三條は不満げな顔をしたが、気を取り直してカメラを眼の高さにあげ 被写体を探した。黄色い泡を口からふいて壁に上半身をあずけている老婆に向けて シャッターの音が何度も聞こえた。その時、人々が急に道をあけた。担架を持った二人の男をつれて、ねずみ色の尼僧服をきた白人と印度人の若い修道女が老婆に近づいた。彼女たちは老婆にヒンディー語で何かを囁き、そのうつろな顔を水でぬらしたガーゼでふいた。

「マザー・テレサの尼さんたちですよ」
と江波が日本人たちに説明した。

「ご存じでしょう。この町に『死を待つ人の家』を作った修道女たちです。彼女たちはカルカッタでああして行き倒れの男女を探しては、臨終まで世話するんです」

「意味ないな」と三條が嘲った。「そんなことぐらいで、印度に貧しい連中や物乞いはなくなるもの。むなしく滑稽にみえますよ」

滑稽という言葉が美津子に 大津のみじめな半生を思い出させた。三條の言うように、大津がヴァーラーナシの町で、瀕死の老人や老婆を無料宿泊所や河の火葬場に運んでも、それはどのくらい役にたつのだろう。それなのにこの修道女や大津は・・・

「わたくし日本人です」
と美津子は白人の修道女に話しかけた。
「何のために、そんなことを、なさっているのですか」

「え」

修道女はびっくりしたように碧い眼を大きくあけて 美津子を見つめた。

「何のために、そんなことを、なさっているのですか」

すると 修道女の眼に驚きがうかび、ゆっくり答えた。

「それしか・・・この世界で信じられるものがありませんもの。わたしたちは」

それしか、と言ったのか、その人しかと言ったのか、美津子にはよく聞きとれなかった。その人と言ったのならば、それは大津の「玉ねぎ」のことなのだ。

「玉ねぎ」とは、イエス・キリストのことにほかなりません。マザー・テレサの修道女は答えました。「それしか・・・この世界で信じられるものがありませんもの。わたしたちは」。私たちははたして、何を信じて生きているのでしょうか。それが本当に信じるに足る 確かなものであれば、と願います。揺るぎない真実に支えられた、確かなものであればと願います。人の世の幻想を思うとき、私たちには「それしか・・・信じられるものが・・・」ないからです。

〔祈り〕

愛する神様。

テレビから癒やしのメロディーが流れ、気持ちの持ちようを説くベストセラーが電車の中吊りを飾

ります。優しさと気配りの勧めがなされ、慰めと同情の言葉が^ゆ行き交^かいます。心地よい^{ぬく}温もりが私
たちを包みます。しかし 神様、私たちが欲しいのは薄っぺらな、バーゲンセールの愛ではありません。
私たちが心底 欲しいのは気休めの言葉ではなく、真実に裏打ちされた言葉です。私たちが探し
ているのは、「この人に嘘はない」と信じ切れる人です。

感謝いたします。御子イエス・キリストにおいて、あなたが身をもって真実のあり^か処を示してくだ
さったことを心より感謝いたします。見せかけの装いや作為の演技とは無縁の、御自身のすべてを懸
けられたあなたの真実に心より感謝いたします。主イエスにおいて示されたその真実を見つめ、その
真実に信^{いざな}頼して生きたいと思ひます。虚栄と偽善に誘^{いざな}われる私たちの弱さをお赦してください。誘惑
に立ち向かう勇気と謙虚さを、そして、誘惑に打ち勝つ力をお与えください。

恵みの主であるあなた御自身がいついかなる時にも私たちを^{みて}御手の内に置き、^{みこころ}御心をもって伴い
立ってくださいますように。

愛する主、御子イエス・キリストの^{みな}御名によって願ひ、お祈りいたします。

アーメン